

知ってほしい 言語聴覚士

いちき串木野市医師会立脳神経外科センター

訪問看護ステーションさくら 言語聴覚士 向井優善



言語聴覚士という職業を聞いたことがあるでしょうか。関係する方々には、ここ数年で少しずつ認知されてきている実感はありますが、まだまだ知られていない職業なので少し紹介をします。言語聴覚士という職業は、主に、聴く、話す、読む、書く、食べる、記憶力や注意力といったことに困っている方を支援します。他にも誤嚥性肺炎を起こされた方や顔面神経麻痺の方、子供の言葉の遅れなども支援を行い、言語聴覚士の需要は年々増えています。また、患者様や利用者様、家族や関係職種等との関わりから、支援する立場ではあるものの、いつも多くのことを学び、経験させて頂いています。

その中でも訪問リハビリでは、利用者様や家族と密にコミュニケーションをとることや、関係職種と目標達成に向けた話し合いをすることの重要性を日々痛感しています。言語聴覚士の訪問リハビリとしての役割は、食事の際のポジショニング調整や摂取方法、食事形態の提案、栄養状態の把握・栄養食品の検討等、食事に関することが多くなっています。また、コミュニケーション面として、呼吸や発声練習、言語練習（絵カードを使った練習や文字をみながらの発話練習等）、高次脳機能練習（ノートを使った記憶や注意の練習、買い物に行くために計画を立てる練習）、小児の言語発達訓練（サ行の練習や語彙を増やす練習等）など小児～高齢者まで幅広く支援をしています。

私は、言語聴覚士として約5年が経ち、病棟3年、在宅（通所・訪問リハビリ）2年経験しています。入院中は、麻痺や症状の改善を目的に、飲み込みの筋力訓練や言語訓練、注意力の訓練を行っています。一方、在宅では、依頼内容により支援の進め方を決定し、週に1～3回程度支援をしています。依頼内容は、ムセ込みが多くなった、口から少しでも食べたい、言葉が出にくい、呂律がまわりにくい。肺炎を繰り返したくないなど予防から機能向上等多岐に渡ります。初回介入で評価を行い、より具体的な目標を立てて訪問リハビリはスタートします。病院での生活とは一変し、訪問リハビリでは利用者様の生活の場でリハビリを行います。家にいるだけで笑顔が増えた例や発話が増えた例、食事量がUPした例等、色んな関わりをさせて頂きました。その中でも、特に印象に残る利用者・ご家族の方がいらっしゃいますので2組お話しします。

1例目は、70歳代女性。事例の夫と義娘より「本人が昔好きだったものをもう一度食べてほしい」という気持ちが叶った例となります。利用者様は、病気の進行と共に食事をすることが難しくなりました。しかし、ご家族の希望として「少しでも食べてほしい」と話されました。家族の希望を実現するために、多職種での連携を図り、評価・訓練を行い、少量だけ口から食べることができました。もう一度食べた姿を見たご家族の「笑顔」は今でも忘れることはできません。家族は、病前に「食べることが好きだった」「私よりもたくさん食べていた」と昔の風景を思い出しながら、嬉しそうに、懐かしそうに話をして頂きました。その中で一番「刺身が好きだった」と話されました。どうにか食べられないかと検討し、本人の飲み込む状態に合わせて食形態の工夫を行い、本人の好

きだったものをまた、食べることもできました。私は訓練する中で、食べたということより、今までずっと側にいて支えてきたご主人の笑顔がみられたことを何より嬉しく思いました。

2例目は、40歳代女性。言葉の問題を抱えている中で、自分がしてみたいことを実現した例となります。利用者様は母親と弟様の3人暮らしをしています。脳梗塞後遺症により、話す・書くことが出来なくなり、うまくコミュニケーションが取れない状況でした。当初は、家族に上手く意思伝達できることを目標にリハビリを進めていきました。利用者様はコツコツとリハビリや自主練習を頑張り、日が経つにつれ家族や親戚、近所の方から「言葉が出るようになった、話そうとする気持ちが増えた」と言われることが多くなりました。ある時、一人で祭りに行ったとの話を伺いました。普段、外出はいつも御家族と一緒にいられているのに、私はびっくりして家族から細かく話を聞きました。なんと、祭りを見るだけでなく、お店の人とやりとりし、商品を2つも注文できたとのことでした。祭りをとても楽しんだ表情が伺え、私まで嬉しくなりました。

「食べること」や「コミュニケーションをとること」は、生きていく中で必要なことです。しかし、病気や加齢の影響により、食べることや話すことが行いにくい方がいることも事実です。「食べたい・話してみたい」を、少しでも後押しし、笑顔が引き出せたら、これ以上私達にとって嬉しいことはありません。

また現在では、介護予防事業で「ひっかけん体操」など予防的な取り組みも増えてきています。訪問リハビリにおいても「口の健康」を守るための予防は非常に大切だと考えており、予防的な関わりも多く行っていききたいと思います。

私達は「してみたい」を実現できるよう、利用者様やご家族とのコミュニケーション、評価～訓練等のリハビリ、多職種との連携を大事にします。

事業所紹介

「いちき串木野市医師会立脳神経外科センター訪問看護ステーションさくら」

行動指針「やさしく・強く・おもしろく」優しさを優先し、専門職として強さを持ち、自分自身も楽しむ。

一緒に働く仲間が、助け合い協働していく、温かいステーションです。地域の専門職の方々と連携し、「生きることの支援」を実践します。地域の訪問看護を必要とされているすべての方に、訪問看護を届けます。